

柳谷素靈先生推奨
井上恵理
本間祥白
考案

鋌^{てい}

鍼^{しん}

説明書

医道の日本社

古研式「鍍鍼」を推奨する

柳 谷 素 靈

鍼經に九鍼の制定あるは、各々その「病人」治療に際して、最も適當なる鍼を使用せしめるにある。病人の現実的狀態は種々な因子のよつて来るべきものであるが、又、これを「証」と把握することも出来る。従つて九鍼の制定は「証」に随つて用うべきものであつて、明治、大正、昭和時代に於けるように、毫鍼のみ多く使用されるようになった近代の鍼技術は、この点古典的指示より相去ること大なる距離ありといわねばならぬ。

漢方治療の四大原則は、汗吐下和にあると主張されているが、鍼術にも又この四法を顯現するに最も適切な鍼が用意されてあることを我々は忘れてはならない。茲に九鍼の用途がある、その用途に応じて三稜鍼も員鍼も大鍼も長鍼も員刺鍼も、我々は實際臨床上裡に使つて来ているし、治療成績もあげつつある、毫鍼のみによつて病を処理治療せんとはしていいないのである。

今般発売された「古研式鍍鍼」と称するものもこのような根本理念から出たものであつて、古典の再検討を臨床的實驗を経て、ここに創案されたものである。

その原典的解説や、効果については別記案内書の通りであるので、ここに蛇足を加えることを差しひかえるが、本器の最も特徴とするところは、誰れにも使用出来て、然もほとんど無害有効なものであるという点に有する。

殊に若い鍼医の屢々おちいるところの刺鍼過誤から完全に解放されるということは、鍼道の社会的認識を是正するであろうと考えられる、虚証患者、鍼を食わず嫌う者、小兒病に対しては、まさに、従来の、鍼に対する考え方を更新するに役立つであろうからである。

わたくしは、本器が、多年臨床に没頭しつつある、井上、本間両氏の臨床的所産として且つ、古典的效果を再現するものとして、大方斯界人の座右に備え臨床に応用せられんことを推奨して止まぬものである。

鍔鍼発売に就いて

井 上 恵 理
本 間 祥 白

鍼術の治療は、経穴に与える刺戟を通じて経絡の虚実を補瀉する事である。古来より鍼は瀉法を容易とし、灸は補法を容易とすると云われているが、鍼治療を専業とする者は灸術を行う事がわづらわしくなるものであるばかりでなく、鍼による補法を行う事が治療効果を早める事を知ると共に、其の方法に一生をささげても良い程の努力に興味を持つものである。

私共も鍼術を専業として最も鍼の補法に苦心し、尚講習会及び研究会に於てこれを講述する度に其の手法の伝授に苦しんで居つたが、私共協同で鍔鍼の使用法を研究した結果この苦しみを軽減する事を知り、古典研究会員に与する目的に製作したものを医道の日本社の懇請によつて広く販布する事にして発売したものである。

一、鍔鍼とは

鍔鍼は古典に記載されている九鍼中の一種であつて、員鍼と共に他の鍼とは違い刺入せず、皮膚上を按じて治療効果を挙げる為のものである。殊に補法を主なる目的として使用されるもので、其の形状及び用法は、靈枢九鍼十二原に「鍔鍼長サ三寸半」「鋒ハ黍粟ノ鋭ナルガ如シ」九鍼論篇に「其ノ身ヲ大ニシテ其ノ末ヲ員ニス」同じく用法は、九鍼十二原に「脉ヲ按ズル事ヲ主ル、陷ツテ以テ其ノ氣ヲ致ス事勿レ」九鍼論篇に「以テ脈ヲ按ジ陷ツテ以テ其ノ氣ヲ致ス事勿ク邪氣ヲシテ独リ出サシム」又「脈ヲ按ジ氣ヲ取ツテ邪ヲシテ出サシム」官鍼篇に「病脉ニアツテ氣少ク当ニ之ヲ補フ者ハコレ鍔鍼ヲ井榮分輸ニ取ル」

以上の文によつて、鍼は脉、血脉を按ずるだけで決して皮膚を破つて刺入してはならない。邪氣のある場合も身体の正氣を補つて邪氣が独りで出る様にするものである。



鍔針の形状は右の図に示すが如く、素問靈樞時代（イ図）は誠に素朴的な形で誕生したのであつたが、中国の明代に至つて古今医統と言う医書では（ロ図）の如く実質的には何等変化はないが、針柄と先尖に工失が凝らされて医療器具としての面目を一新した感があつたのである。今般更に私共研究の結果、此の鍔鍼を考案し、古典研究会式（古研式）と銘名して公開したのであるが、此れは針柄を太くし銀製の針体の元にスプリングを装備し、患者の体に当る感じに柔軟性を持たしたのである。此れによつて四肢の要穴の如き感受性の鋭敏な経穴に施術するに非常に効果的になつたのである。

又針柄の裏は同じく九針中の一つである円針として兼用出来る様に考案したのである。円針は経絡を摩して其の虚実を調えるものである。

二、治療目標

補法を行う事を目的とする鍔鍼は、其の症候は虚証であつて、血虚及び気虚、何れにも使用される。

血虚とは血液の不足する事であるから貧血症は勿論、心臓衰弱によつて全身の循環が障害された場合の症状である。古典では血虚から来る症状として耳鳴、動悸、眩暈、四肢痿弱、腹痛、頭痛、便秘、難産等が挙げられている。

気虚の場合の気とは呼吸作用の気と脳、神経方面の作用を意味するものである。気虚とは此の方面の作用が衰え

た事であり、呼吸微弱、少し運動すれば却つて動悸、呼吸困難、喘息を起し易く、又常に気分が優れず沈みがちであり、記憶力衰え、神経過敏である、病が進めば眩暈、耳鳴、心悸亢進、頭痛、身熱等が伴うと言つた症状である。

以上の様な虚証は体質的なものか、又は内因七情（喜怒哀憂思悲驚恐）勞倦、（房事過度、身体の過勞）飲食の過不及等より起こるもので、この原因によつて経路が虚証となり、全身的な疾病症状となるものである。

その原因による結果は、各人の体質及び生活環境によつて相違し、これが診察（望、聞、問、切）によつて経絡の虚証を診断する事が出来るのである。

この虚証の治療に當つて、若し毫鍼等による手法を誤ると病氣が良くならないばかりか却つて悪化せしむる事がかなり多い。此処に虚証に対する鍼法のむづかしさがある所以である。

そこで先に示した心臓病、呼吸器疾患、脳神経衰弱等や、其の他の疾患でも貧血している場合、微熱、盗汗、目汗、眩暈、精神又は肉体の過勞している場合、常に特異体質と言われる刺戟過敏な者等は、毫針其の他の鍼よりも皮肉を破らぬ鍔鍼に断然適応するものである事が実証出来るのである。

小児鍼は御承知の様に皮膚接触によるもので、藤井秀二博士の研究によつて学理が明らかにされている如く、これも鍔鍼の運用で代用し同様な効果を挙げる事が出来る。

三、使 用 法

鍔鍼は鍼の形状が示す如く刺入が目的ではなく、治療部位即ち経穴を半円形の尖端で圧迫して治療するので、次の様な手法が区別される。

- 1 単圧法 経穴部位を圧迫し漸次強くして被術者の快く感ずる程度とする。
- 2 単圧雀啄法 単圧法を繰返し行う。単圧法では不快な圧痛がある場合に用う。

3 単圧転位法 単圧してから施術部の皮膚を押手によつて、上下左右に移動させる、単圧しても被術者に何の感覚もない場合施術部位を移動させる事によつて正確な施術部を発見する事が出来る。

4 転位雀喙法 施術部周辺を数多く圧迫し乍ら移動させる方法で、広い範囲の施術局部や実症局部に治療する時に用いる。

5 廻転圧法 硬結の中央部に単圧して鍼尖部を移動せしめて、硬結の周囲を廻転し乍ら圧迫を加える、硬結ある部位に用いる。

補瀉の方法

鍼鍼の治療は、虚証に対するものが主であつて而も経絡の虚实を補瀉する、即ち身心の調和を計る本治法（経絡治療の主要となるもの）に対し最も簡易に行える事が特徴である。

この故に経絡治療の習得を先決として医道の日本発行の「経絡治療講話」を熟読して補穴の要穴を運用する事を提唱する。次に簡単に其の手法を列記すれば、

◎補法……押手（左手）の拇指下に施術部を置き示指を添えて其の間に鍼尖部を挟み、刺手（右手）で徐々に力を加える、施術者は初め何の感じもしないが、暫くして快い響きを感じられ、術者の押手拇指下に刺鍼と同じ様な気の出る事が感じられる。然る後に徐々に力を抜いて鍼を除き後を揉む。

◎瀉法……実症部位には押手を使用せずに、刺手に持った鍼を局部に押し当て、手早く刺して抜き除く事を繰返す、単圧雀喙法を手早く行う様にする、然る後に実症の近い処に虚証穴を撰択して補法を行う。

尚標治法（局部治療）としては、毫鍼の手法に代用させても充分の効果がある、標治法に於ても融診によつて快い処、疼痛には押して痛みは軽快する処、凝りに対してでも総て虚証に用いると非常に効果がある。

四、結

論

暫らく顧られなかつた「刺さざるはり」此れが数千年前に鍼の歴史と共に存在したにかかわらず此処に今こそ新しく提唱しなければならぬ理由は何処にあるだろうか、私達が単に物珍らしく墳墓の中から古の物を採り出したのではない、こう言うものを使わねばならない時代に遭遇しているのである。文化の進むにつれ社会生活が非常に複雑になり、自然生活から次第にかけ離れて不自然極まるものとなつてゐる。今日の人で自分は病氣はないと思つてゐる者でも昔の健康人から見れば全部半病人であろう。頭脳と身体をとことん迄すり減らした者達はかりである。昔の人達から見れば皆氣を虚し、血を虚した人である。こう言う人が一旦病氣になるから昔の眞の実症性の病になる者なんかは一人もない訳である。従つて昔の方法によつて瀉法を行へる病人は稀にしかないと言ふ事になるのである。實際に四肢の悪穴を使つて体全体の虚実を補瀉するにあたり筋肉を傷つて、手法をなすものよりもむしろ刺入しないで目的が叶う者の方が遙かに多いのである。靈樞經の官鍼篇に「病脉ニアツテ氣少ク当ニ之ヲ補ウモノハコレ提鍼ヲ井榮分輸ニ取ル」とある。古典で經の字の附くものはさすがに万代に通ずる原理を含んでゐるものに驚嘆せざるを得ない。提鍼を使わねばならない病人は古からあつたに相違ないが今日の時代程此の適応者の多い事はなかつたと思う。

要穴は治療反応が敏感であるから脈脉や三部九候に直ちに變化を与へ本治法として提鍼の効用は實に顯著であるが又一方他の經穴に於いても疾病の反応として表われた硬結圧痛等を直接刺鍼せずとも提鍼によつて去り疾病症状に好反應を表わす場合が非常に多い事が臨床上明らかに立証出来るのである。此の場合の圧痛硬結も結局氣の凝りであるからである。

近來発達した指圧療法と言うものがある。此の手技の中には脊椎矯正、マッサージ等色々な種類のものが併用されてゐるが其の内で最も主体をなすものが名称通り指圧である。而して其の指圧部指圧点たるものが大体に於いて

経絡であり経穴に一致しているのである。彼等にして言わしむれば指圧は手当の起原である。医療の最も元祖であると言っているのであるが、元祖は元祖として認められるが「指圧術としての」学理も技術も何も生れなかつた。只鍼灸医学としてのみ発展したのである。而も其の経絡経穴を其のまま指圧点として応用して何んの元祖の面目あらんやである。猶指圧の治療理論は上述の鍥鍼の埒外には一步も出ないのである。

又小児鍼もそうである。前述の通り小児に取つては刺鍼を出来るだけ少くし氣を泄すことは極力避けなければならぬ。此の故に鍥鍼を出来るだけ応用すべきである。



鍥鍼説明書

昭和四十五年九月二十日

東京都台東区入谷町一ノ十六ノ三

考案者 井上恵理

本間祥白

横須賀市追浜本町一ノ四五

発売元 医道の日本社

電話 (〇四六) 一六五二三六(代表)

振替東京 一六三五四一番

郵便番号 二三七